クロソイド曲線

クロソイド曲線の基本式

式 番 号	式	説明
(1)	\$RL=A^2\$	曲率半径\$R\$と曲線長\$L\$の積が定数(一定)
(2)	<pre>\$\dfrac{d\tau}{dL}=\dfrac{1}{R}\$</pre>	曲率の定義式: 曲線の曲がり具合を表す
(3)	$\star = \left(\frac{L^2}{2A^2} = \frac{L}{2R} \right)$	接線角\$\tau\$はクロソイドパラメータ A と曲線長 L で決まる 分母の\$A^2\$に(1)式を再代入
(4)	\$L=A\sqrt{2\tau}\$	(3)式を\$L\$について解く
(5)	$R=\frac{A^2}{L}=\frac{A}{\sqrt{2}}$	(1)式に(4)式を代入
(6)	<pre>\$dx = dL \cos\tau\$ \$dy = dL \sin\tau\$</pre>	曲線の微小変化\$dx,dy\$は、曲線長の微小増 分\$dL\$と接線角\$\tau\$を成す
(7)	<pre>\$x = \dfrac{A}{\sqrt{2}}\displaystyle\int^\tau_0 \dfrac{\cos\tau}{\sqrt{\tau}}d\tau\$ \$y = \dfrac{A}{\sqrt{2}}\displaystyle\int^\tau_0 \dfrac{\sin\tau}{\sqrt{\tau}}d\tau\$</pre>	クロソイド曲線\$(x,y)\$は、 クロソイドパラメータ\$A\$と接線角\$\tau\$で 決まる ここで、接線角\$\tau\$は(3)式で定まる

接線角\$\tau\$の導出

(1)式を $R=\color{A^2}_L$ \$を(2)式の右辺に代入すると、微分方程式 $\color{A^2}_L$ \$を(2)式の右辺に代入すると、微分方程式 $\color{A^2}_L$ \$が得られる。これを $\color{A^2}_L$ \$について解く $\color{A^1}_L$ \$

クロソイド曲線\$(x,y)\$の導出

(6)式から(7)式を導く。まず、(6)式に(4)式を代入して\$\tau\$で式をまとめる[^2]。

 $\$ dx = dL\cos\tau= d(A\sqrt{2\tau})\cos\tau = A\cdot \dfrac{1}{2}(2\tau)^{{rac}{1}{2}-1}\cdot d(2\tau)\cos\tau = \dfrac{Ad\tau}{\sqrt{2\tau}}\cos{\tau} \$

 $\$ dy = dL\sin\tau= d(A\sqrt{2\tau})\sin\tau = A\cdot \dfrac{1}{2}(2\tau)^{\frac{1}{2}-1}\cdot d(2\tau)\sin\tau = \dfrac{Ad\tau}{\sqrt{2}}\sin{\tau u} \$

したがって、(6)式は二つの微分方程式になる。

 $frac{dx}{d\hat = \frac{A}{\sqrt{2}}, \hspace{0.5cm} \frac{d}{d\hat = \frac{A}{\sqrt{2}}}$

これらの微分方程式を各々解く。

 $\ y = \int^{\alpha_0} \int^{\alpha_0} d\theta d\theta = \inf^{\alpha_0} \int^{\alpha_0} d\theta d\theta = \frac{A}{\sqrt{2\pi u}} \sin\theta d\theta = \frac{A}{\sqrt{2\pi u}}\int^{\alpha_0} d\theta = \frac{A}{\sqrt{2\pi u}} d\theta = \frac{A}$

(7)式がこれで導出された。(7)式はフレネル積分を含む式である。

クロソイド曲線\$(x,y)\$の計算

クロソイド曲線上の任意の点 $P^{(x,y)}$ は、クロソイドパラメータ $A^{(y)}$ と接線角 $A^{(y)}$ は、クロソイドパラメータ $A^{(y)}$ は、クロソイドのままでは 具体的に値を計算できない。いったん被積分関数を無限級数にした後に積分する。無限級数の形にすることによってコンピュータ上で正確に値を計算可能になる。

\$\$ \begin{array}{cl} y & = \dfrac{A}{\sqrt{2}} \displaystyle\int^\tau_0 \dfrac{\sin\tau}{\sqrt{\tau}}d\tau = \dfrac{A}{\sqrt2{}} \int^\tau_0 \tau^{ -1/2 } (\tau - \dfrac{\tau^3}{3!} + \dfrac{\tau^5} {5!} - \dfrac{\tau^7}{7!} \dots) d\tau; \hspace{0.5cm} //\sin\tau\text{を展開} \ & = \dfrac{A}{\sqrt2{}} \displaystyle\int^\tau_0 (\tau^{1/2} - \frac{\tau^{5/2}}{3!} + \frac{\tau^{9/2}}{5!} - \frac{\tau^{13/2}}{7!} \dots) d\tau; \hspace{1cm} // \BZ\tau^{-1/2}\epsilon \ & = \dfrac{A}{\sqrt2{}} \left(\dfrac{2}{3}\tau^{3/2} - \dfrac{2\tau^{7/2}}{7\cdot3!} + \dfrac{2\tau^{11/2}}{11\cdot5!} - \dfrac{2\tau^{15/2}}{15\cdot7!} + \dots + \dfrac{(-1)^{n-1} 2\tau^{(4n-1)/2}} {(4n-1)(2n-1)!} + \dots\right); //\frac{\tau^7}{15\cdot7!} + \dots + \dfrac{(-1)^{n-1} \tau^{2n-1}}{(4n-1)(2n-1)!} + \dots\right); // 2\tau^{1/2}\epsilon \ & = A\sqrt{2\tau}\left(\displaystyle\sum^{\tan^2}\end{\tau^{11/2}} \tau^{1/2}\epsilon \ & = A\sqrt{2\tau}\left(\displaystyle\sum^{\tan^2}\end{\tan^{11/2}} \tau^{1/2}\epsilon \ & = A\sqrt{2\tau}\left(\displaystyle\sum^{\tan^2}\end{\tan^{11/2}} \tan^{1/2}\epsilon \ & = A\sqrt{2\tau}\left(\displaystyle\sum^{\tan^2}\end{\tan^{11/2}} \tan^{1/2}\end{\tan^{11/2}} \tan^{1/2}\e

これで、\$x, y\$どちらも無限級数で表せたのでコンピュータで計算可能になった。

また、これらに\$(3)式\tau=\dfrac{L}{2R}と(4)式L=\sqrt2\tau\$式を代入すると、クロソイド曲線ではお馴染みの計算式であることがわかる。

 $x = L \left(1 - \left(L^2 \right) + \left(L^4 \right) - \left(L^6 \right) + \left($

数値計算上の工夫

一般に無限級数で表現される一般項をそのままコンピュータで計算する際には次の課題がある。

- 6 乗 7 乗など高次の項は整数値がコンピュータ上で扱える最大値を超えてしまい誤った数値になる
- 級数は小さい順や大きい順に計算しないと誤差が大きくなる
- 級数を有限項で打ち切る場合は、精度評価しておく必要がある

したがって、こうした無限級数の計算では、一般項そのものを計算するのではなく、隣接二項間漸化式を利用して各項を逐次 計算する。各項は十分小さな値になったところで計算を終了すれば良い。この方針でクロソイド曲線を求めるアルゴリズムを 以下に示す。

級数における係数数列の一般項

クロソイド曲線\$(x,y)\$の共通項の各項を要素とする数列をそれぞれ $\$x_n$, $y_n\$$ とすると、\$x, y\$の式は次のようになる。

 $$$ \left(\frac{2\pi^2}{5\cdot dot2!}, \frac{4}{9\cdot dot4!}, -\frac{2+x_3+\cdot dot5}, & x_n = \left(\frac{1, -\frac2}{5\cdot dot2!}, \frac{4}{9\cdot dot4!}, -\frac{13\cdot dot6!}, \cdot \right), & x_n = \left(\frac{1, -\frac2}{5\cdot dot2!}, \frac{4}{9\cdot dot4!}, -\frac{13\cdot dot6!}, \cdot \right), & x_n = \left(\frac{1, -\frac2}{5\cdot dot2!}, \frac{13\cdot dot6!}, \frac{13\cdot dot6!},$

さらに偶数項を x_n \$奇数項目を y_n \$とする新しい数列 c_n \$を考えると、x, y\$は次のようになる。

 $$\ \left(x_{x_1+x_2+x_3+\cdots} = A\right)(c_0 + c_2 + c_4 + \cdots) \setminus y = A\right(y_1+y_2+y_3+\cdots) = A\left(c_1+c_3+c_5+\cdots\right) \setminus c_n = \left(t_1, \frac{1+c_3+c_5+\cdots}{1-\cdots}\right) - \left(t_1+c_3+c_5+\cdots\right) + c_n = \left(t_1+c_3+\cdots\right) + c_n = \left(t_1+c_3+\cdots\right)$

この新しい数列 $$c_n$$ の隣接二項漸化式を求めるために $$c_{n+1}$$ と $c_n$$ の商である数列 $$\dfrac{c_{n+1}}{c_n}$$ を考える。

 $\frac{c_{n+1}}{c_n} = \left\{ \frac{3\cdot 1}{5\cdot 2}, \frac{5\cdot 1}{1\cdot 2}, -\frac{11\cdot 1}{1\cdot 2},$

したがって数列 c_n \$は、隣接二項間漸化式として $c_{n+1} = \frac{(-1)^n(2n+1)}{au}{(2n+3)(n+1)}c_n$ \$ であることがわかった。

この漸化式を用いると初項 $$c_0=1$ $$e_5$ えるだけで数列 $$c_n$ \$o6項が求められ、計算過程において、数列 $$c_n$ \$o元になった数列 $$x_n,y_n$ \$e50万に計算していることがわかる。

 $$$ \left\{ \frac{3\cdot c_0 = .1 \&= .1 \&\& =. x_1 \& c_1 = .(-1)^0 \left[\frac{3\cdot c_0 + .2 \& .c_1 = .c_1)^0 \left[\frac{3\cdot c_0 + .c_1 \& .c_2 = .c_1)^0 \left[\frac{3\cdot c_0 + .c_2 = .c_1)^0 \left[\frac{3\cdot c_1 \&= .c_1 &= .c_1 &= .c_1 &= .c_1 \right] }{1 + .c_1 \&= .c_1 &= .c_1$

数列 $$c_n$$ の漸化式から $$x_1\rightarrow y_1 \rightarrow x_2 \rightarrow \dots<math>e 順番に計算できる。これら\$e\$x, y\$に交互に足し合わせることで目的の\$(x,y)\$の理論式である(7)式に一致する。この時、 $$y_n$$ が十分小さくなるまで繰り返せば良い。

 $$$ \left(c_0 + c_2 + c_4 + \cdot c_3 + c_4 + \cdot c_4$

丁張マンの中でのクロソイド曲線の計算コード

本稿で考察した内容そのもので実装がなされている。

```
T = Tau(A, R)
X = 1
Y = T/3
g = -Y
h = 1
I = 0
Do Until Abs(g) \leq 0.0000000001
   g = (2 * h + 1) * T * g / (2 * h + 3) / (h + 1)
   If I = 0 Then
       X = X + g
        I = 1
   Else
       Y = Y + g
        I = 0
       g = -g
   EndIf
   h = h + 1
Loop
j = Sqr(2 * Abs(T))
X = X * A * j
Y = Y * A * j
```

解説

- 1: \$\tau\$を計算
- 2: \$x_1\$を初期設定
- 3: \$y_1\$を初期設定
- 4: 一般項の係数\$(-1)^n\$部分
- 5: 一般項の添字\$n\$と同様
- 6: \$x, y\$を交互に計算するためのフラグ変数
- 7: 一般項の収束条件
- 8: 一般項そのもの
- 9-18: \$x、y\$に順次計算して足し合わせている
- 19-21: 係数調整

係数数列\$c_n\$の存在理由

係数数列 x_n, y_n に両方含む数列 c_n を考えることにより、収束判定ループを一つにできるからである。

ある関数\$f(t)\$の積分である $\$x(t) = \displaystyle \int f(t) dt \color bt f(t) \color bt$

積分した関数を微分すると元に戻り、微分した関数を積分しても元に戻る。微分と積分がお互いに逆演算であること。